

\*\*\*\*\*

## 平成 28 年 12 月 26 日(ビバークキャンプ★一日目)

\*\*\*\*\*

午前 9 時。空は光も射してきそうなうす曇り。広い駐車場に、10 台程度の自家用車。芝の上に停車した車から子どもたちが軽快に飛び降りてくる。子供たちの荷物は、意外とコンパクト。どの子も＜参加の手引き（しおり）＞に書いてあるとおりの小さめのリュックを背負い、寝袋とマットを両手にぶら下げている。足元は長靴や靴。寒さ対策だろうか。毛糸の帽子、キルティングのスカート、ダウンジャケットを着込んでいる子もいる。今日の最高気温は 16 度の予想。風もあまりなく、フリース一枚着ていれば、さほど寒さを感じない。夜の冷え込みは別として、青空広場につく頃には、荷物を降ろしながら上着を脱ぎたくなるような晩秋の陽気だ。

全員が集めたところで朝の挨拶。「おはようございます。さっそくですが…今日はこれで解散！！」スタッフがニヤリと笑いながら伝えると、子どもたちは「?!」と驚きの表情を浮かべ「どういうこと!？」と声をあげた。保護者はほほえましくそのやり取りを見守ってくれている。「明日の 13 時、この駐車場でお父さんやお母さんのお迎えがあるまでは、気温が 0 度になろうと大雨が降ろうと、森で一晩過ごします。必要なものや足りないものがあると思う人は、今のうちにお父さんやお母さんに相談したり工夫しておいて下さい。解散したら、背中リュックに入っているものだけで持って、森へ移動します。」

親子で顔を見合わせうなずいたり、リュックの中身を再確認したり。身支度の最終確認と別れの儀式は 1 分程度で終わった。保護者の多くは、すでに何年も子供たちを森へ送り出してくれているベテランばかり。ビバークキャンプに送り出すぐらいだから、さすがにある種の余裕を感じさせる。「せっかくだから、雨が降ると楽しいかもね〜!」「ご飯はどうするのかな? (笑)」「眠れなかったら、とりあえず焚き火しながら起きていれば大丈夫よ (笑)」などなど、あつけらかんと子供たちの背中を押してくれる。突如『これにて解散』とスタッフに言われ「ええ〜っ?!」と動揺した子供たちだったが、軽やかな保護者の声かけに覚悟を決め、みんな凜々しい面持ちになった。そんな表情を記念にと、全員で集合写真を一枚撮った。

そもそもビバークとは、登山やハイキングなどをしていて、天気が急に悪くなったり、仲間に病人がでる、またはコースが険しいなどの理由で予定通り登山ができそうにない、などの理由から、計画していなかったキャンプ（宿泊）をすること。つまり、非常事態で

屋外に泊まることをいう。その為、テントを携帯していない場合は「予備の洋服を重ねて寝る」「リュックサックで風をよけて丸くなる」「洞窟の中で一晚過ごす」「簡単な雨よけを作る」「雨水をためて水分を取る」「焚き火で暖をとりながら一夜を明かす」などのような、シンプルな方法で一夜を明かすことが想定される。

今回のビバークは計画的ではあるが、日頃の活動で培った技や知恵をフルに活用して様々な困難を自分たちの力だけで乗り越えていってもらうことを最大のミッションに据えていた。「本日は、御日柄も良く…」では、せっかくの醍醐味も薄れる。適度に寒く、適度に雨が降り、それなりに工夫や努力を要するような、多少ハードさが伴う条件であることが望ましい。つまり、「何もないより、手ごろな試練ならいくらでもあったほうが面白い」ということである。

真冬ビバークは初めての試みだが、今日～明日は11月並の気温ということで冷え込みはさほど心配ない。むしろ問題は「寒さ」ではなく「雨」のほうだ。朝一番の天気予報では、15時より60%で雨予報となっていた。同じ雨でも、朝から降ると午後から降るとでは準備の余裕が全く異なる。雨の中テントを張ることになれば、かなりの労力がかかる上、荷物や全身が濡れてしまえば、一夜を明かすにも大変だ。これが15時からの降雨予想となれば、雨の降らない時間に十分対策をたてられ、うまくいけば晩ご飯の準備もできる。また夜間の雨天であれば、イノシシやアナグマなどの出没の確率が下がり、その点も好都合。今日の天気、仕掛けた側のスタッフにとっては、この上ない<絶好のビバーク日和♪>なのである。

さて、保護者と別れて駐車場を後にした子供たち。15分ほど歩いて住宅街をぬけ、目指すは宿泊拠点となる<青空広場>。今回はそこに3つのテントを張り、活動ベースを作る。テントは事前にスタッフが運び込んであるため、身の回りの荷物だけをもつての移動だ。森の入口までは下り坂のため、子どもたちの足取りも軽やか。顔なじみの男の子7名、女の子6名、年長から小学5年生の合計13名。ご近所や山羊に挨拶しながら、列は右へ左へと蛇行し目的地へ向かう。途中、番犬に吠えられても「激励だ♪」とあって笑ったり、「寝袋は何度も使っているから大丈夫」とか「テントも張ったことあるから自分でできる」「焚火はまかせて」とか、それぞれの腕自慢に花が咲く。学校の成績表ももらった直後だっただけに、「〇がいくつ増えた」「減った」と和やかな雰囲気。いつも通いなれた道。冬らしい真っ青な空も広がってきて、気分上々。

9時半。青空広場に到着して荷物を下ろし、まずは車座になってオリエンテーション。今回のルールは3つ。①「自分の命は、自分で守る」 ②「Respect Others～他者を尊重する」 ③「弱音は吐いてよし。ただし、あきらめない」。加えて「自然を大切にしよう」という4つ

目の項目が2年生の男の子から提案された。スタッフはこの4つをA4の紙に一つずつ大きく書いて、手洗い場の壁に張り出した。

①については『自然はそう甘くはない、緊張感をもって臨んでほしい』ということ。キャンプの鉄則は、「晴れでも雨支度、夏でも冬支度」。夜は間違いなくまとまった雨が降る。テントの雨対策をしっかりとやらなければ、洋服や食糧が使えなくなってしまう。暖を取るにも、雨の強さや準備次第では、焚き火ができるかわからない。イノシシやアナグマの痕跡もあるので、夜間に出没するかもしれない。昼間はなんでもないことが夜は事情も変わり、条件も変わる。それに対してできる準備はすべてしておく。雨がだいぶになったら川が増水し氾濫の危険やがけ崩れの可能性もある。リスクはできうる限り想定し心得ておくことを伝えた。

②は、『私たちは一人では何もし得ない、だからこそ相手を尊重し協力し合うことが大切』であるということ。年齢や性別に関係なく、今日集まっている13人はそれぞれ得意・不得意があり、異なるアイデア・経験値を持っている。個々の能力を最大限発揮することはもちろんだが、話し合い等で意見がまとまらない時、互いに少しずつ妥協したり、しなやかに相手の考えや気持ちを受け入れることがコンセンサスの極意。一人ひとりが気持ちよく楽しく過ごすためにも、とても大切なことだ、と話した。

最後に③。自分たちだけでテントを張ったりご飯を作るのは、けっこう大変かもしれない。この後天候が悪くなり、寒さ雨に凍え、夜は更に暗さに怯えることになるかもしれない。家族が恋しくなったり帰りたくなることがあるかもしれない。そういう気持ちは恥ずかしくないし、表現しても構わない。ただし、絶対に途中で投げ出したりあきらめないこと。ピンクハウスにも絶対に戻らないぞ！という意気込みで、困難から逃げず、果敢にチャレンジしてほしい、と加えた。

ここまで話すと、少し子供たちの表情が引き締まったのが分かった。2日間を通じて、楽しさやドキドキの中にも緊張感を持ち、時間や天候などに見通しをもって、年齢・性別を超えて協力し合うことが、今回のビバークキャンプの成功の鍵であることが理解できたようである。その後、男女のグループに分かれて話し合いの場を持たせた。といっても、課題は2つしかない。＜寝床を作る＞ことと＜晩ご飯と朝ごはんの支度＞。

寝床はテントがメインになるが、雨対策にブルーシートなどを二重に張ったり寝心地や水はけ対策用にスノコを作ったり、一般的には周囲に溝を掘るなどの作業が考えられる。15時の降り始めまでになんとか作業を終了させ、荷物一式をテント内に運び込んでおくことが目標だ。食糧については1回だけ購入チャンスがあるので、そこで必要なものを予算

の範囲内で買う計画を立てる。予算の使い方は自由。おやつを買ってもおもちゃを買っても構わない。ただし、食糧が足りなくなっても他のグループから貰ったりスタッフからの補助はない。天気予報を参考にしながら、調理時間や手際、寒さ対策や万一の時の予備を考慮にいれ、必要な食材と量をリストアップし、グループごとに2日分の見通しを立てる。

グループ内における役割や係なども、必要に応じて設定してよい。また「何をどの順番で」という段取りも、すべて子供たちが考えて決める。テントよりも先に買い出しに行ってもいいし、早くから晩ご飯を作っても構わない。誰が料理をして、とか、全員でテントを立てるか否かなど、すべてがグループの話し合い次第だ。すでにビバークは始まっている。何を、いつ、選択し実行するのか…一つ一つの決断がその後の結果を左右する。

グループでのディスカッションは10時から始まり、意外と時間を取っていた。男の子グループでは、4年生の2人がリーダーシップを発揮。オリエンテーションにおいて＜テントの雨対策＞が一番重要であると考えた2人は、まだ状況がぼんやりとしか飲み込めていない低年齢の子たちに懇切丁寧説明していく。「食事は何とかなる」「テントをしっかり張ることが、夜を乗り越えるために大切である」と、一人ひとりの理解力にあわせて話す、なかなか簡単にはいかない。

というのも、低学年の5人は、テントではなく晩ご飯が気になっていた。キャンプといえば食事が楽しみというのもよくわかる。彼らは、焼き肉だのカレーだのと主張していたが、「じゃあ、それ、自分で作れるの?」と＜2人に諭され→閉口する＞を繰り返した。晩ご飯の頃は雨だから、片付けが大変なメニューは避けておきたいというのが高学年の意見だ。至極あたりまえ。メンバーをみれば、尻ぬぐいは自分たちがすることになるのは容易に察しがつく。5人に優しくも即答で「ごめん。焼き肉とカレーは、絶対ダメ～(笑)」と、こちらも妥協しない。随分長く話した末、最後には＜焦げ付いた羽釜＞＜肉片のこびりついた網＞…考えただけでも面倒な後始末を雨で真っ暗闇の中、ゴシゴシやらねばならないことをイメージさせ、とりあえず4人を納得することができた。

しかし、それでも諦めきれない2年生1名が残った。カレーを作るのを楽しみに参加してきたとのこと。そう易々と譲れまい。他の4人はすでに高学年側につき、1名残った最後のカレー派を語気も強く言い負かそうとする。すると低学年の一人が「お湯で温めるやつならいいんじゃない?」と提案。「レトルトか!いいね。あれなら辛さもハヤシライスも選べるよ♪」と高学年。すると「ご飯もレトルトのがあるから、お湯さえ沸かせればまとめて作れるし、洗い物も片付けも楽だね♡」と、話がトントン拍子に進む。強硬カレー派1名は「それ、戦隊物のシール付いてるやつ?僕、そのカレーがいい!シール、絶対欲しい!」今度は、カレーでなくシールに興味が変わる(笑)。4年生がまた諭すように「シールはわか

んないけど、あるかもね。じゃ、それで決まりね！！」と気が変わる前にと速効結審。「朝ごはんは、パンとスープか何かを買ってきて、やっぱりお湯ですむようにしよう」と付け加えるようにまとめた。

一度決まれば、男の子は動きが早い。4年生を頭に2グループに分かれ、買い出しとテント張りを同時進行で進めることにした。買い出しグループはさっそく小走りに駐車場へ向かうが、その道すがら、大きなシイタケをいくつも採取してカレーに添えるというから要領がいい。4人はスタッフと一緒に、吉野の生協へ一路向かった。

一方、女の子グループ。小学1年、2年、3年、4年2人、5年と理想の縦割。一人を除いて、全員森での経験は長い。普段の活動でも調理や焚き火では中心になってテキパキとこなす顔ぶれだから、男の子のレトルトとは違ってメニューには期待が高まる。しかし、意外や話し合いがうまく進まない。何度仕切り直しても話がまとまらない。調理をしたい子、面倒だからしたくない子。気が付けば、「中華料理がいい人～？」「バーベキューがいい人～？」などと多数決を取っている。それもフルコースのような話っぷり。この繰り返しでは、1時間たってもまとまらない。そのうち、予算を人数割りしてそれぞれが自分の好きなものを買う案がでてきた（ええっ??みんなでビバークするのに??<Respect others>の精神はどこへ??）…本人たちもさすがに話の方向性が見えなくなってきたようで、少し気分を変えて、全員でテントを張ることにした。

さて、生協では男の子グループが買い出しスタート。低学年連中を連れだった4年生リーダーが1円単位で計算し買い物をリードする。「君たちは、この棚から好きなレトルトを一つ選んでいいよ。辛さがいろいろあるから気をつけてね」。高額品の棚を除いて、買っていい商品棚を指定をしている。さすがだ。その中に、キャラクターシール付のカレーをみつけた1人が、パッと手に取りパッケージを抱きしめる。「これこれ！これ！これ！！これがいいっ♡」大興奮だ。可愛いかったのは、そばにいた年長児。一番の最年少なのに、出発前の話し合いでは「シールなんて、お腹を満たさないんだから買っても無駄だよ」と2年生に対し見下すような物言いだったが、パッケージを見た途端「僕もこれにする♡」と、二人でニコニコ大満足。「これがいいよね！」「ね！」と急に仲むつまじくなっていた（笑）。

レトルトは様々な種類があり、個性派揃いのメンバーでも各々が納得いくチョイスができた。白米は、リーダーが責任をもって湯せんできるタイプを見つけ買い物がこごに入れる。わかめスープは、サイドメニューに。サンドイッチのパンも3割引を見つけ、迷わずゲット。意外と安く済みそうだということになり、枚数を入念に数えてハムとチーズも購入。マヨネーズは、しっかり一番小さいタイプを選び無駄を省く。寒さ対策と万一の時のためにと、粉末ココアとカップラーメンも購入。カップラーメンは、何かと好みにうるさい低

学年のためにバラエティパックを購入し、値段を抑えてニーズに応える堅実ぶり。

おやつに手を出す前に、会計を一度締めてほしいとのリクエスト。どうやらおやつの購入予算に当たりを付けたらしい。結果、1000円近くのお釣りが。リーダーから、大盤振る舞いのく好きなおやつの購入許可があり、低学年の子供たちは歓喜をあげてお菓子売り場へ走った。テントを張ってくれているメンバーの分も見越して、一晩では十分すぎるほど購入。それでも100円余った。「上手に買い物できたね」とスタッフが褒めると、1年生が「余った分は女の子達にあげていいよ」と余裕を見せた。昼前には買い物をすませた男の子グループ。テントサイトに帰ると丁度ランチタイム。テントもそれなりになんとか立ちあがっていて、一定の成果。家族が持たせてくれたお弁当を、全員揃って余裕の表情でほおばった。

一方の女の子グループ。テント張りは経験者が多く、男の子たちよりも手際が良いし、張ったテントも格好良い。途中、手こずっている男の子組に「アドバイスしてあげたら？」と声をかけても、「嫌だ」とライバル心丸出し。しかし、男の子達が買い物を済ませテントを張り終わった頃になっても、相変わらず買い物の話は平行線のまま。とりあえず先にランチを済ませるといふ。12時をまわると、先ほどまでの青空はすっかり姿を消し、予報どおり雲行きが怪しくなってきた。「食べたらずぐ買い物に行きたいです！」ひゅーっと冷たい風が頬をよぎると、さすがののんびり女の子達も焦りを感じたよう。結局、意見はまとまらないまま「それぞれで好きなものを買う」ことになった。

車までの道すがら、更に空が暗くなってきた。「帰り道、雨降ってきたら、どうなる？」スタッフが声をかける。すっかり女子トークで盛り上がり緊張感がどこかへ置き忘れられてしまっている6人。最初に気が付いたのはキッズクラス出身の1年生。「あ〜…今から雨具を取りに戻ってくる！！」と、駆け足でテントサイトへ引き返した。釣られるように、2年生、3年生…と来た道を引き返し、全員手に雨具をもって買い物に出かけた。

12時半。案の定、車が走り出して5分すると大粒の雨が降り出した。ワイパーを使わなければ走行できないほどの雨に「雨具、持ってきてよかったね〜♪」と胸をなで下ろしたもつかの間、「ちょっと〜私らテントに荷物入れてないじゃん！！」「予報は15時だったよね？まだ13時前なのに！なんで?!」と、慌てふためく車内。幸い、生協に着くころに通る雨は上がった。彼女たちは雨で何か気付きがあったのだろうか。通り雨は、まるでビバークの神様から彼女たちへのメッセージにも思えた。女の子たちは、小走りで店の中へ入って行った。

入口で小さいカゴを各々取り、1年、3年、4年の3人は、お菓子売り場に直行した。キ

キャラメルやキャンディー、ガム…普段買ってもらえないのか、いやむしろ、いつも買ってもらっているおやつなのか。なんの迷いも疑いもなく、バンバン手にとり、腕に掛けている買い物カゴへポンポン放りこんでいく。一方、残りの3名は、店の入り口付近から売り場に動きながら足取り重く、ボソボソ話をしている。「作ったら、片付けもあるよね」「雨降ったら寒いから、温かいものあったほうがいいよね」「この調子じゃ、晩ご飯つくる時間なんてないよ、きっと」「みんなで一緒に作ったほうが効率いいよ、やっぱり」通り雨のお陰か、頭の中にぼんやりあった不安が口から突いて出る。どうやらこの3人は、最初からみんなで調理をしたかったらしい。焚き火をつけて調理すれば暖もとれるし一石二鳥と考えたが、全員でのコンセンサスは得られなかった。男の子たちの買い物をヒントに、この3人はお菓子売り場を通り越して、レトルト棚へ向かう。ご飯、カップラーメン、粉末ココアを手にしつつも「マシュマロは絶対譲れない」と2袋購入。朝食用にスープ、パン、いちごジャム。もう中華料理や焼き肉などといった無謀なメニューは出てこない。堅実に予備の食料品に加え、お菓子も好きなものを一定量購入し、9円オーバーで買い物を終了させた。

お菓子売り場にいった別の3人は、もはや晩ご飯と朝食のことは忘れていた。心配になったスタッフが3度声をかける。「これで本当にいいの?」「晩ご飯と朝ご飯、何食べるの?」「寒さ対策とか、おなかすいた時の食べ物とか、大丈夫?」「自分のものは自分で購入するんだよね?明日の朝までお菓子だけで本当に足りる?」。しかし、彼女たちなりにイメージはあるようで、「メロンパン、半ぶんこして食べるの♡」「ロールケーキ買ったもん♪」「おなかすいたら、お菓子たくさんあるから大丈夫～♪」と、山ほどのキャンディーとチューインガムを見せてくれた。それも、軽快かつ陽気(汗)。「あとで足りなくても、お友だちからは貰えないよ、スタッフも余分持ってないし」「買い出しはこの1回だけ。またお店に来るのはできないから」と念押しするも、「ぜんぜん♡大丈夫」「ねえそれより、このアメ、どっちの味がいいと思う?」など、全く会話がかみ合わない(笑)。この3人が暗闇の中、お腹をすかせ、寒さに凍えることは容易に察しが付いたが、これもビバーク。何事も経験…とスタッフは会計を言われた通り締める。女の子たちのそれぞれ2チームを見ていて、ふと、グリム童話「アリとキリギリス」を思い出した(笑)。

先ほどの通り雨には一瞬冷やっとさせられたが、その後、雨は夕方まで降ることはなかった。冷え込みもない。スタッフは少し胸をなでおろす。男の子も女の子も、この予報ハズレの晴れ間を有効に使って、テントの補強と焚き火の準備に入った。男の子は12月の活動で制作した秘密基地の部品を活用し、竹のスコノを作ってテントの下に敷く。テントの上にはタープ、さらにその上にブルーシートを張って、大雨に備える。テントの周りにはクワを使って10cmぐらいの溝を掘り巡らせる。雨をためて余所に流しだす作戦。女の子たちもその技を盗み、見様見まねでブルーシートを張り、溝を掘った。

焚き火は慣れたもの。雨も風もない好条件だから、想定よりも早く焚き火ができて湯が沸いてしまった。まだ16時。いくらなんでも晩ご飯には早すぎる。お菓子をいっぱい購入したキリギリスチームの女の子たちは、我が世を謳歌するように、買ってきたお菓子をうれしそうにむさぼり食べている。もちろん、誰にもわけない。…いいんです、自分のものだもの。その代わり、晩ご飯用といって買ったメロンパンにだけは、くれぐれも手を出さんじゃないよ（汗）…スタッフは祈る気持ちでその様子を見守った。

テントも準備万端で焚き火のウオーミングアップも終わったので、缶蹴りしたりゴム跳びしたりと全員で遊ぶ。最近のジュニアクラスでは、今年度初頭から昭和の遊びやわらべうたを取り入れていて、多くの子供たちを惹きつけている。大人から与えられたものでなく、昔から子供たちの間で引き継がれてきた子供の遊びは、ルールにも流れにも工夫があり、小さい子から大きな子までがそれぞれのレベルで楽しむことができる。役割があり、鬼も順番にまわってくるし、いわゆる弱者救済の＜味噌っかす★ルール＞もある。縦割りの森の子供たちにとっては、どの遊びもルールもしっかりくるようだ。

途中、雨がよいよ降り出し雨具を着る。寒さは大したことないが、やはり予報どおりしっかり降り始めた。缶蹴りでは、雨水でぐちゃぐちゃになってきた地面をスライディングしながら缶を蹴る1年生の男の子。雨具が面倒と着ないものだから、汗と雨ですでにびしょぬれ…。缶蹴りの要領を得ない女の子たちは、ひたすらじっと森の中にかくれていて、いつまでも缶を蹴りに来ない。ゴム跳びは、男の子も大いに盛り上がる。女の子達もけっこう上達し、足首から徐々に高さを上げていくのだが、まだまだ昭和生まれのスタッフたちにはかなわない。

17時。そうこうしているうちに、気付けばスタッフの晩ご飯はできあがった。缶蹴りやゴム跳びをしている小雨の間に、着々と自分たちの食べるものを準備していたスタッフ。これでもかと大人の技を見せつける。チキンとジャガイモのダッチオーブン焼き。野菜たっぷりのトマトスープは栄養も食物繊維もたっぷり。市販のくるみパンですら、アルミホイルで包んで炭火で焼いて、ほっこリアツアツ。いい香りが森中に広がり、みんなの嗅覚に届いて食欲をそそる。

子供たちはその匂いで晩ご飯の準備を思い出す。さっき点けた焚き火は遊んでいる間に種火も消えてしまい、雨の中最初から火起こしをしなければならぬ状態に。寒さで手がかじかみ、雨にぬれたマッチではさっきのように思い通り着火しない。薪も杉の葉も湿気が邪魔してうまく火が広がらない。こんな時こそ、みんなで知恵をだし工夫しなければならない。女の子の3人アリチームもレトルト用にお湯は欲しいが、男の子たちとわざわざ



別々に作るのは効率が悪いと考えたようで、彼らに協力して全員で1つの火を作ることにした。お菓子大好きキリギリスチーム3人は、すでにテントにこもって夕食用に購入したメロンパンを食べ始めている。

雨の中の焚き火は、想像以上に大変だった。たった鍋一杯のお湯が沸かせない。これでもかこれでもかとマッチを擦るが、一向に点かない。より乾いた杉の葉をせっせと運んでくる子、マッチの火が消えないように手で覆う子、雨で火が消えないように雨よけを作る子、懸命に雨の中小さな火を扇ぐ子…だからこそ点火した時のうれしさ、達成感は何ものにも替え難い。みんなで沸かした羽釜の湯に、レトルトのカレーやご飯を入れていく。一度に全員分は到底入らないから、互いに譲り合って順番を待つ。雨の中、焚き火が消えないように火の番をする子、湯を待ちきれずポリポリとカップラーメンを食べながら待つ子。それぞれ順番を待つ。必ず自分にも廻ってくるとわかっているからこそ待てる時間。そしてその順番も妙に理にかなっている。どうしても待てない子が先、雨の中、びしょぬれになりながら一生懸命火を作った子の順位も高い。自分の貢献度を計り、後でいいと譲り合う子たちも。言葉少ない中にも彼らの中で自然と全員の納得がいく順番が決まっていく。他者を尊重すること、自分が一步譲ることで成立する、すばらしい場面だった。

雨で気温も下がってきて、ようやく点いた火が温かさや明るさを提供してくれる。空はすっかり雨雲が厚く広がり、周囲の森は真っ暗闇と化していた。自然と食べ物を持ちながら子どもたちが焚き火に集まってきて、いろんな話をしている。これで焼き肉や中華料理にしていたらどんなことになっていたか、とレトルトカレーを頬張りながら「これ♪最高！」「超おいしい♡」とアリチーム3人組。「男子～お湯ありがとう♪」という感謝の言葉も忘れない。食後に、慣れた手つきでマシュマロを焼く彼女たち。とてもうれしそう。焚き火を提供してくれた男の子たちに<お礼>とあって、マシュマロをあげている。男の子たちもとてもうれしそうにうけとり、一緒にマシュマロを頬張っていた。

一方、メロンパンでは到底空腹が埋まらないとようやく気付いた、キリギリスチーム3人組。うらやましそうな表情で、焚き火周辺に集う他の子供たちのところに寄ってきた。おいしそうな湯気の上がるカレーやハヤシライスや、和気あいあい食べている友達。(スープも温まりそうだなあ。いいなあ…。) バツ悪そうに「お湯ちょうだい」と声をかけてきた。雨の中、みんなで苦労して炊いた貴重な湯。「焚き火やるから手伝って」と、当初彼女らにも声をかけたのに、「自分たちは使わないもん」というような言いつぶりで一切協力せずテントの中で遊んでいた3人に対し、みんな「どんな対応するのかな？」と見ていたら、「お湯だけは♪おごってあげる～」とイヤミの一発をガツンかましたものの、ちゃんと潔く分け与えた。キリギリスチームは、小さな声で肩身狭く「ありがとう」とお礼を言って、ようやく温かい飲み物にありついた。

ギリギリ私たちは空腹に耐えかね、プライドを捨てて「マシュマロもちょうだい♪」と甘えてきた。さすがに考えたアリチームだったが、3人で迷うことなくこれもちゃんと分けてあげていた。その時の心境を、後日アリたちに尋ねてみると「一瞬、納得できなかったけど、ビバークの約束事だったし (Respect others)、森の中では一人では過ごせないから」「失敗したことも、みんなでフォローするのが大事だと思って」「今回の経験を次に活かしてもらえれば、それでいい」との回答。一方、ギリギリ私たちも「今度はちゃんとご飯の計画立てたいです」と振り返り。日常生活の中で、なかなか失敗体験をする機会がない現代の子供たち。小さい失敗をたくさん重ねることの大切さ、互いに学び合うことの素晴らしさ…今回のビバークで象徴的なエピソードとなった。

食事の片づけが終わる頃には、奇跡的に雨雲が切れた。予報をみても夜中までは晴れ間が続くそう。迷わずナイトハイクに出かけることにした。まだ時刻は18時半。いつもなら煌々とテレビや電気をつけて、これから晩ご飯の家庭もあるかもしれない。しかし森は、暗くて寒くて真夜中のようで、今にも寝袋にもぐりこんで眠ろうかという雰囲気だ。

焚き火の始末をして、西本願寺方面へ向かうことにした。縦走して再び川沿いから一周してくるコースだと2km以上の道のり。懐中電灯をつけてしまうと、かえって周囲が見にくくなるので、極力、人工光を使わずに歩く。夜目の利く高学年を先頭に、まずはひだまり広場へ向かう。風はほとんどなく、雨はすっかり上がり、暗い森はたっぷりの水分で潤っている。青空広場から向かうみちは下り坂になり、雨をたくさん含んだ山の斜面にツルツルと足元を取られる。それにしても月のない夜は暗い。雨上がり、雨露がポタポタと落ちる音がそこかしこに響いて、森の奥行きを感じさせてくれる。最初怖がっていた低学年の男の子は、スタッフや仲間の力を借りて初めての夜の森を進みだす。

ひだまり広場に到着する頃には、全員が暗間にもすっかり慣れ、懐中電灯なしで歩けるようになっていた。広場にそびえたつ急斜面を見上げ、夜行性の生きものの気配に耳を傾ける。年間4,000人の参加者が森を訪れるようになり、かつてひだまり広場に住みついてきた野ウサギは2年ほど姿を見せてくれていない。野ネズミの食痕もなかなか見つけられなくなっている。きっとこの斜面の上に生活空間を移動したに違いない。そんな話をしながら、ひだまり広場を抜けていった。

目が慣れた子供たちは、ひだまり広場から西本願寺までの急な登り坂を何の苦労もなく、まるで昼間の森のようにスムーズに歩いていく。気が付くと先の方に街灯が一つ、また一つと見えてきて一気に目の前が開け、まぶしい住宅街の強い光が子供たちの列の間から差し込んできた。森の暗がりとのあまりのギャップに不快感を覚えた子供たちは、目を細め

ながら手で顔を覆った。森の暗闇の自然さに比べて、私たちの生活には不自然というより異常なほどの光やエネルギーが溢れかえっている。子供たちは無言で、車のライトが行き交う道路を1列になって目を伏せながら歩いた。

北側の川沿い入口に到着し、再び森に戻る。今度は住宅街の光を背に受けながら、真っ暗な森へ吸い込まれるように歩いていく。不思議だが、森に入ったとたん、子どもたちの足取りが軽くなり、楽しそうに会話を始めた。この空気、この暗さ、この静けさが、彼らにはとても心地がいいのかもしれない。

200m 川沿いを歩いて、青空広場に戻ったのは20時過ぎ。よく歩いた。各自就寝の準備をするかと思いきや、お菓子を持ち寄って自然と焚き火を囲み始める。歯ブラシを加えながらくる子もいたが、すぐにお菓子の誘惑に負けた。雨対策に張っておいたブルーシートの下、小さな焚き火をつくり、鉄板で覆った火を囲んで全員が小さな木の椅子を持って円を作る。学校の宿泊学習では、キャンプファイヤーなどするのだろうか。そこには、学校行事のようなヤラせっぽい感じはなく、怪談話やなぞなぞクイズを互いに披露したりの、穏やかな笑顔と明るい笑い声、ほんわかあったかい、ほっこりした時間が流れた。翌日の解散前のふりかえりでも、このお話の時間が一番楽しかった、という子供たちが後を絶たなかった。自然と進行役が生まれ、思いもよらない子が噺家のように仲間から笑いを誘っていた。こんな時、話が得意な子は大胆に、一方苦手な子や目立つのが嫌な子は引っ込みじあんになってしまうものだ。しかしこの時は、誰もが一度は主役になって話していた。スタッフが作ったわけでも進行役が意識したわけでもない。安心して自分を表現できる雰囲気、それぞれが他者に対して醸し出していた。ピバークの神様はそんな子供たちの様子を見守ってくれているように、近郊では大雨が降っていたこの時間帯も、吉野の森にだけは傘をかけ雨から守ってくれていた。おかげで、子どもたちのケラケラと転がるような小さなかわいい笑い声は、21時半の消灯まで途切れることはなかった。スタッフは一人ひとりの体調を見ながら、邪魔にならない程度に輪の周辺に座り、お菓子がなくなりそうになった時だけ差し入れを渡し、子どもたちの話にただ耳を傾けた。

21時半。男女それぞれのテントに戻り、就寝。これまで雨が降らなかったのは本当にミラクルで、夜中には間違いなく大雨になることを全員に周知。雨の強さによっては、川の増水等も踏まえ真夜中の撤退もありうることを想定し、入念にテントの雨対策をチェックして寝袋にもぐった。夜中にノドが渇いてもいちいち雨の降る外へ出なくて済むように、枕元に水筒を準備した。長靴もテント内に格納し、万一夜中にトイレに行くことになって、テント入口に傘と懐中電灯を備えておいて、すぐに行ける等、万全の態勢をとった。

夜中0時半を過ぎると雨は本格的になり、午前2時には打ちつけるような強い勢いで降

った。前後には予想どおり川が増水し、雨の音以上に轟音をたてて耳元を川が流れていくような恐怖も味わった。その音が怖くて眠れなかった子供たちもいたようだが、実際の推移は 5~60cm ほどの上昇。もし昼間だったら大して気にも留めない程度だろうが、夜中テント一枚で感じるそれは、昼間の印象とは全く違うものだった。

子供たちのとった雨対策は一晩しのぐには十分で、手作リスノコのお陰で下から水がしみてくることもなかったし、ブルーシートがテントを守って雨漏りもなく、溜まった水もちゃんと溝へ集められていた。むしろテント内が熱気で温度上昇し、夜露がついて寝袋が濡れてしまうことはあったが、それも睡眠を邪魔するほどでもなかった。気が付けば、霧のような小雨の中、明るい朝を迎えた。

\*\*\*\*\*

## 平成 28 年 12 月 27 日(ビバークキャンプ★二日目)

\*\*\*\*\*

朝 7 時過ぎ。ポツポツとトイレに起き始め、起きた者から焚き火作業に加わって朝ご飯用のお湯を沸かす。サンドイッチや菓子パンの朝食に、どのグループもスープやココアを準備していた。スタッフは昨日多めに作っておいたトマトスープに、米やチーズなどをふんだんに入れて、トマトリゾットを作る。昨夜の焚き火のいい雰囲気そのままに、子供たち全員に振る舞い、みんなでフーフーいいながら「おいしい♪」「おいしい♪」とたくさん食べた。昨日遅くまで車座になって囲んだブルーシートの下に、また同じ顔が並ぶ。すっかり兄弟のような家族のような 13 人。椅子をゆずりあったり、道具を貸しあったり…そういうことが、年齢や性別を超え、自然体で行われている。

8 時半。朝食が終わるころには、雨が上がる。大変なのは撤収だ。食材を残さず食べ切り、封をあけずに残った予備食品はグループごとに山分けして各自持ち帰る。テント内や外の荷物置き場に散らばっているすべての私物を一固めにし、それぞれ荷造りした。ブルーシートを結んでいたロープも雨で湿り、地面に近い部分は泥だらけになっている。ブルーシートについた泥は雑巾で拭きとり、たたまなければならない。地面に少しでも触れてしまえば、再び泥だらけだから、これがとても難しいし頭を使う。頑丈に！と、ブルーシートにたくさん結びつけたロープも一つ一つほどいて泥を洗っていく。ペグもたくさん地面に打ちこんでいて、それを抜くにも大変な作業だった。

森の活動では、汚い作業や人が嫌がる仕事の類が、いつも付いてまわる。そんな時こそ、露骨に一人ひとりの個性や成長がいろいろ現れるものだ。一人で黙々と作業する子、なるべく避けようとする子、仲間に引っ張られる子、全く関心のない子…学校での奉仕活動でもいろんな子供がいることだろう。しかし森では、多くの子供たちが作業を率先してやる。それは、ジュニア開設当時からそういう雰囲気徹底して作ってきたことにある。最初は学校のように逃げ回っていた子も、少なくとも森では、他の子たちと同じように片付けやゴミ拾いをする。何回も何年も繰り返ししていくことで、「嫌だ」とか「やりたくない」とか「めんどくさい」という気持ちがわき起こる前に体が動くようになる。それが習慣になり当り前になってくる。むしろ動かないと気持ちが悪くなっていく。ビパークの片づけ場面でも同様である。中には、学校でも率先して行動しているんだらうな、という頼もしい動きの子たちがいる。いや、今日の学校や社会では、そんな動きをする彼らはマイノリティかもしれない。だからこそ、彼らにはこの種を蒔き続けて欲しいと思う。彼らのブレない心・行動は、きっと周囲をジワリジワリと変化させていく力を持っていると信じている。

途中遊びも入りながらの 3 時間半。青空広場が元通りになったころには、スタッフがランチを運び込む時間となっていた。雨は片付けに引き続き、昼食時もあがってくれていた。野菜ジュースと軽食を片手に、がらんどうになった真冬の青空広場の大きな丸太に腰掛けて、一人ひとり感想とふりかえりを話してもらおう。「次は食事をしっかり作りたい」「テントをもっと上手に張りたい」「もっと楽しくて難しいなぞなぞを調べてくる」「またみんなと焚き火したい」「雨でも上手く焚き火ができるようになりたい」などなど、楽しかったことに加えて悔しかったことや次回やりたいことがたくさん上がった。

子どもたちの気持ちは、すでに春のビパークに向かっていった。程よい自然からの挑戦を受け、自分たちの知恵と協力で乗り越えて達成感を味わい、学校とは違う仲間とのつながりに心地よさを感じた 2 日間。また挑戦したい！と思えることが、今回のビパーク成功を何より物語っている。途中、それこそ兄弟げんかのようなシーンも所々あったけれど、けろっと忘れて仲間と笑い、解散後、家族の顔をみれば、疲れも甘えも愚痴もドッと出たかもしれない。でも最後の挨拶は、やっぱり「また春に、森で会おう」だった。たった 2 日間だったけれど、子供たちは一回りも二回りも大きくなって、仲間たちに手を振って今年最後の森を後にした。

終